

大久保遺跡

—平成15年度国補緊急地方道路整備事業に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—

2004.3

茅野市教育委員会

OOKUBO-SITE

大久保遺跡

—平成15年度国補緊急地方道路整備事業に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—

2004. 3

茅野市教育委員会

序 文

大久保遺跡は平成15年度国補緊急地方道路整備事業に伴い、記録保存を前提に緊急発掘調査を茅野市教育委員会が実施したものです。

大久保遺跡は、平成14年度に事業に先立ち試掘調査が行われ、縄文時代前期の狩猟を中心とする生産域であることが判明していましたが、今回の発掘調査によりその全貌が明らかになり、遺跡の全体像が明確になりました。

発掘調査の結果、縄文時代前期末葉と考えられる堅穴住居址1軒と、落とし穴2基が確認されました。これらの落とし穴より当地域が狩猟を中心とした小規模な遺跡であったことが判明しました。

大久保遺跡は大泉山の南西斜面に形成された小崖疊地と、特有な地形を呈し、その様相は八ヶ岳西南麓内に於いても特徴的なものですが、本遺跡周辺特に大泉山東側の櫻木地区の山麓台地では梵天原遺跡、上見遺跡、稗田頭B遺跡、中原遺跡で、西側の古田地区の山麓台地では久保御堂遺跡、師岡平遺跡、威力不動尊東遺跡で落とし穴が検出されています。特に中原遺跡を除く6遺跡では、落とし穴が群をなす縄文時代の集団の狩り場が把握され、生活領域の研究に多くの成果を得ることができました。今回検出された大久保遺跡は単独で検出されたこともあり、やや性格の異なる面を有しているものと考えられ、単独獵の可能性も考えられています。

今回の調査で得られた成果は少量ですが、縄文時代の狩猟域の多様性を考える上に重要な点を数多く含んでいるものと考えられ、このような小規模な遺跡の解明の積み重ねにより、当時の生活・生産活動を復元することができるものと期待します。

発掘調査にあたり、長野県教育委員会、地元地権者、長野県諏訪建設事務所の皆様の深いご理解とご協力に感謝すると共に、調査ならびに作業にあたられた皆様のご苦労により、無事終了できましたことを心からお礼申し上げます。

平成16年3月

茅野市教育委員会
教育長 両角 源美

例 言

1. 本書は、長野県諏訪地方事務所長北原正義と茅野市長矢崎和広との間で締結した「埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書」に基づき、茅野市教育委員会文化財課が実施した平成15年度国補緊急地方道路整備事業に伴う、長野県茅野市大久保遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査・遺物整理・報告書刊行は、長野県諏訪建設事務所よりの委託金により、茅野市教育委員会が実施した。調査の組織等の名簿は第Ⅰ章第2節4調査の体制として記載してある。
3. 試掘調査は平成14年11月28日から12月11日、本調査を平成15年11月14日から平成15年12月11日まで実施し、図面整理、出土品の整理等は発掘調査終了後行い、報告書の刊行も平成15年度に茅野市文化財課が行った。
4. 発掘調査から本書作成までの作業分担、執筆分担等は第Ⅰ章第2節3に記してある。
5. 本報告に係る出土品・諸記録は茅野市尖石縄文考古館で収蔵保管している。

凡 例

1. 調査区の測量基準杭は計画道路幅杭による。また、遺構図面上に表されている北は磁北を示す。
2. 本報告書に掲載の土坑の遺構実測図は1/60、土器拓本1/2、石器の一部は1/1を基本とした。
3. 土層の色調については『新版標準土色帖』の表示に基づいて示した。

目 次

序 文

茅野市教育委員会教育長 両角 源美

例 言・凡 例

第Ⅰ章 発掘調査の概要.....	1
第1節 発掘調査に至るまでの経過.....	1
1. 調査に至るまでの協議.....	1
2. 本調査に至るまでの協議経過と諸事務.....	1
第2節 発掘調査の方法と報告書刊行.....	1
1. 発掘調査の方法とその経過.....	1
2. 調査日誌（抄）.....	2
3. 遺物整理と報告書作成作業.....	2
4. 調査の体制.....	2
第3節 発掘された遺構・遺物の概要.....	4
1. 遺構の概要.....	4
2. 遺物の概要.....	4
第Ⅱ章 遺跡の概観.....	4
第1節 遺跡の位置と環境.....	4
1. 遺跡の立地と地理的環境.....	4
第2節 遺跡周辺の歴史的環境.....	5
1. 遺跡周辺の遺跡とその地理的位置.....	5
2. 遺跡の研究史.....	7
3. 遺跡周辺の歴史的事象と史跡.....	7
第Ⅲ章 遺跡の層序と調査区の概要.....	8
第1節 調査区の基本的層序.....	8
1. 土層の基本的な堆積状況.....	8
2. 土層の成因と性格について.....	8
第Ⅳ章 検出された遺構と遺物.....	9
第1節 検出された縄文時代の遺構と遺物.....	9
1. 検出された縄文時代の遺構.....	9
2. 縄文時代前期遺物の概要.....	12
第Ⅴ章 調査の成果と課題.....	14
第1節 縄文時代前期末葉の大久保遺跡の様相.....	14
1. 大久保遺跡の特徴.....	14
2. 八ヶ岳西南麓の縄文時代前期末葉の遺跡.....	14
3. 大泉山周辺の縄文時代前期末葉の遺跡.....	15
4. 大泉山周辺遺跡群内での大久保遺跡.....	16

図 版

抄 錄

第Ⅰ章 発掘調査の概要

第1節 発掘調査に至るまでの経過

1. 調査に至るまでの協議

遺跡確認に至るまでの経過 本遺跡は国補緊急地方道路整備事業が計画されるに先立ち、当該地を実地踏査した結果黒耀石剣片が少量採集された。これをもって遺跡登録がなされたが、その事態は不明のままであった。そのため、事業に先行し試掘調査が平成14年度に実施され、その概要が把握された。

2. 本調査に至るまでの協議経過と諸事務

調査に至るまでの協議経過 平成12年に平成13年度公共事業に関する保護協議が長野県教育委員会文化財・生涯学習課・長野県諒訪建設事務所・茅野市教育委員会文化財課により行われ、その結果記録保存の方向が決定された。協議は事業に先立ち本調査を実施するものとして、平成13年度より事業に備えたが用地確保等の問題より事業は延期となり、実際事業に着手できたのは平成14年度に入ってからである。試掘事業は事業地約2,400m²の対象地に対して行い、試掘・発掘調査に関わる経費は、事業主体者が負担することを確認した。

これに対して試掘調査業務委託を平成14年11月11日付け14諒建第618号で、長野県諒訪建設事務所長北原正義と茅野市長矢崎和広の間で、調査業務委託契約書が締結された。それによると、平成14年11月11日から12月20日までに委託料800,000円で事業を行うこととした。その後遺跡内容が当初予定より希薄であったために、事業規模が縮小となり平成14年12月20日14教文第85-2号をもって変更委託契約を締結し、事業費を510,000円とした。

本調査は8,000,000円で発掘調査事業を計画し、平成15年8月20日付けで長野県建設事務所長と茅野市長間で契約が締結された。調査費は当初8,000,000円で契約したが、検出遺構が少なかったことによる調査面積の減少に伴い、その後調査費900,000円に変更を行った。

なお、発掘諸法令事務を下記の通り行った。

発掘諸法令事務の経過

平成14年度（試掘調査）・平成15年度（本調査）

平成14年10月31日 14教文第70-1号 河原・大久保遺跡埋蔵文化財発掘通知(57条3第1項)・意見書の提出
平成15年12月8日 15教文第119-12号 河原・大久保遺跡埋蔵物見届と保管所の提出

平成15年12月8日 15教文第119-2号 河原・大久保遺跡発掘終了報告の提出

第2節 発掘調査の方法と報告書刊行

1. 発掘調査の方法とその経過

調査区の設定と発掘調査の方法 試掘調査により遺跡の広がりは、崖縁地の一部に限定されることが把握された。この結果をもとに調査範囲を決定し、最終調査面積は700m²となった。調査区のグリッド設定は、道路用地幅杭を基準とし、遺構が検出された範囲を調査区として設定した。

遺構測量 遺構の測量は平板測量により実施した。基本土層の観察は、畑地内は耕作等の関係よりブライマーな土層堆積を示している地点はなかったが、最も耕作の影響を受けず土層の遺存状態の良好であったB区谷部部分に於いて行った。なお、発掘現場における諸記録は守矢昌文、遠藤佳子、篠原リカ子、宮坂ひとみが携わった。

2. 調査日誌（抄）

平成14年度調査（試掘調査）

- 11月28日 重機の搬入と調査区内に繁茂する雑木、草等の除去作業と、境界杭の確認作業を実施する。
- 11月29日 重機による遺構確認トレントをG列まで掘り進む。
- 11月30日 重機を用いて西側調査区の雑木処理と、境界杭の確認作業を行う。
- 12月3日 試掘トレントPまで設定し、調査を実施する。試掘トレントPより縄文時代前期末葉諸磧式期の土器片1点が検出される。
- 12月4日 調査区の観察等を終了し、トレントの埋め戻し作業にはいる。
- 12月9日 昨日からの降雪のため、現場全体が白銀の世界である。片付け作業のための除雪作業。
- 12月11日 除雪作業を行いながら、重機の撤収を行い本日で試掘調査を完了する。

平成15年度調査（本調査）

- 11月14日 本日より本調査にはいる。調査建設事務所小笠原主任の立ち会いのもとに、重機を搬入。試掘調査により遺構が確認された試掘トレントI周辺、試掘トレントJからNまでをA地区本調査実施区、遺跡西側試掘トレントPの西側半分をB地区本調査実施区と設定し調査にはいる。調査区は雑草の繁茂が著しく草等の蔓除去に手間取る。
- 12月1日 本日より発掘作業員を導入し、遺構確認・遺構の掘り下げる作業を実施する。試掘調査により確認された落とし穴状の土坑を第1号土坑とし、掘り下げ作業にはいる。
- 12月2日 昨日掘り上げた第1号から3号までの土坑の清掃作業と、写真撮影作業を行う。
- 12月3日 昨日より開始したB区から検出された第1号住居址の掘り下げ作業の終結。
- 12月4日 A区の遺構及び地形測量の実施。第1号住居址の精査。調査建設事務所小笠原主任調査状況確認に来跡。
- 12月5日 第1号住居址の精査と写真撮影。その後遺構測量とB区の地形測量を実施する。
- 12月8日 重機を用いて調査区の埋め戻し作業を開始する。発掘機材の搬出と片付け作業を行う。
- 12月11日 重機による埋め戻し作業を終わり、調査を完全に終了する。

3. 遺物整理と報告書作成作業

遺物の整理と遺物の復原 遺物整理・報告書作成は他の事業の合間を縫い、調査終了後から実施した。発掘調査面積が少なく、検出された遺構も落とし穴で遺物が伴わないものであったために、縄文時代前期末葉の土器片が2点と少量なものであった。遺物の注記の略号は遺跡番号の331を冠し、遺構名、地点・層位の順とした。

遺構平面図等・写真的整理 遺構平面図は、平板測量により得られた1/20の原図を用いた。土層断面図は遺構の埋没状況の把握を目的に観察を行った。

現場に於ける記録は、測量図だけではなくカラースライドボジ・モノクロネガ・カラーネガ等の写真記録を撮り、ネガについては現像後ペタ焼きしファイル保存とした。なお、原稿執筆用・報告書図版用には2L版プリントを利用した。

遺物実測と報告書作成 現場に於いて作成した図については、報告書中に図示するように配慮した。

4. 調査の体制

調査主体者 両角源美（茅野市教育委員会教育長）

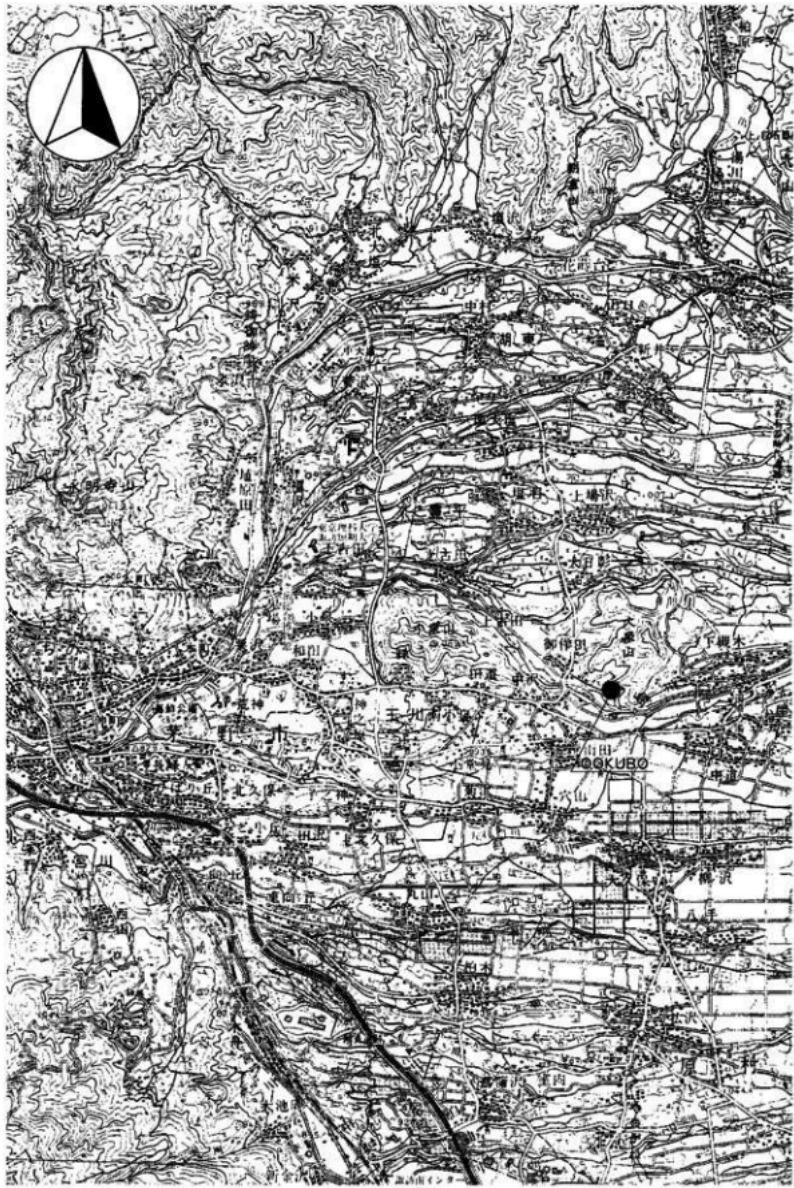
事務局 宮坂耕一（茅野市教育委員会教育部長）

小平廣泰（文化財課長） 守矢昌文（文化財課文化財係長） 小池岳史 百瀬一郎 柳川英司 大月三千代

調査担当者・報告書執筆 守矢昌文

発掘調査・整理作業協力者 金子清春 宮坂 勇

発掘調査期間中、遺物整理期間中、調査建設事務所を始め地権者の方々にご助力頂き、調査を円滑に進めることができた。謝意を表し明記したい。長野県教育委員会文化財・生涯学習埋蔵文化財係諸氏はじめ多くの方々より有益なご指導・ご助言を頂いた。感謝を申し上げたい。



第1図 大久保遺跡位置図 (1/50,000)

第3節 発掘された遺構・遺物の概要

1. 遺構の概要

検出された遺構の概要 本遺跡から検出された遺構は、縄文時代前期末葉に帰属すると考えられる堅穴住居址1軒と落とし穴2基、時期不明の土坑2基だけであるが、当時の小規模な散村形態の集落の在り方と狩猟域との関連を考えるのに重要な資料が得られている。

検出された遺構 検出された遺構は堅穴住居址1軒、落とし穴と考えられる土坑2基、土坑2基だけである。

2. 遺物の概要

縄文時代の遺物 遺物の主体を占めるものは縄文時代前期末葉の遺物が第1号住居址覆土内より1点、B区遺物包含層より1点の少量が得られているだけである。

黒羅石は剥片等5点総重量にして9.6gが検出されている。全て第1号住居址覆土内からの検出である。また、打製石斧破片1点が検出されている。

遺物の総量は少なく、その内容も貧弱であることに、本遺跡の特徴を見いだすことができよう。

近世の遺物 平安時代・中世に帰属する遺物の検出はないが、近世から近代にかけての陶磁器片が2点検出されているが、遺構に伴うものではなく出土状態から考えると、畑耕作に伴い堆肥等に混在したものと考えられる。なお、これらの陶磁器は19世紀末からのものが主体を占め、特に瀬戸窯染め付け磁器碗である。

第II章 遺跡の概観

第1節 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の立地と地理的環境

遺跡の位置 大久保遺跡は長野県茅野市豊平8601番地他（御作田）に所在する。遺跡の位置する御作田地区は市域の北東に位置し、大久保遺跡はJR中央本線茅野駅から東方向に直線距離にして約5.6kmのちょうど八ヶ岳西麓に位置する大泉山の南縁麓に位置する。

遺跡の地理的環境 大久保遺跡は八ヶ岳の火山活動により形成された台地上突出した大泉山の南側斜面部崖錐地に位置している。この地は畠地として利用されているが、大きさは改変されておらず、従来の地形相を色濃く残している。また、西側にも同様な入り組み谷状の崖錐地を形成している。

本遺跡の立地する地域を巨視的に見ると、八ヶ岳の火山活動を起源とする、新八ヶ岳期の火碎流堆積物により形成された、第Ⅱ段丘面に隆起した変質輝綠岩類を基盤とする大泉山の山麓に位置している。山麓部南側に流れる柳川を隔ててそれ以南は、八ヶ岳火山起源の広い山麓部が望める。

遺跡の立地する大泉山裾に形成された崖錐地は、大泉山山裾が浸食・崩落作用により形成されたものと考えられ、大泉山基層の変質輝綠岩類が土砂に大量に混在し、低い部分は周辺の地下水浸透の湧出が見られる。当時こうした湧水が獣の水場だった可能性も考えられ、このような条件が本遺跡を成立させた一つの要因であった可能性が高い。

南側端は柳川に浸食されたものか切り立った崖状となり、崖下は数段の柳川起源による河岸段丘が形成される。そのため遺跡の立地する崖錐地は、大泉山に大きく入り込んだ入り組み状の独立した地形を形成している。

遺跡の立地する地は大泉山の山麓に抱かれた独立する地域で、南・西に開けた日照時間が長い生活環境の整った地形と位置付けることができる。

第2節 遺跡周辺の歴史的環境

1. 遺跡周辺の遺跡とその地理的位置

遺跡の地理的位置 遺跡の立地する扇状地は、大泉山麓に開まれた独立した地域である。また、柳川を臨む絶好の位置に立地している。崖錐地の基層には変質輝緑岩類を含んでおり、これを用いた剥片が1点検出されている。遺跡の立地する崖錐地形を頂部に向かい通り、大泉山の頂上脇を経て下桜木へ至る山道が、近年まで運送の重要な道であったようであり、大泉山を隔てているものの、桜木周辺の台地へは意外に近距離にあったものと捉えることができる。

本遺跡周辺に立地する遺跡 本遺跡の立地する地域は大きく大泉山を中心にグループ分けをすることができ、桜木段丘に位置する群、大泉山南・西麓に位置する群に大別することができる。

本遺跡周辺には西側より河原遺跡（331）・上の平遺跡（166）が（大泉山南・西麓遺跡群）立地している。これらの遺跡の中で、河原遺跡はその様相が不明確な部分もあるが、上の平遺跡は古くより遺跡としての認識がなされており、数回にわたる発掘調査も実施され、遺跡の内容が若干ではあるが把握されつつある。本遺跡はこれらの遺跡と入り組み谷状に分断するものの、個々の遺跡の時期や位置関係等から大きな遺跡群を形成していると想定することができ。群を構成している遺跡の概要について記述し、本遺跡から検出されている遺構との関連性についても考えてみたい。

また、大泉山を隔てて大泉山東側にある桜木遺跡群の（梵天原遺跡・上見遺跡・中原遺跡・稗田頭A遺跡・稗田頭B遺跡・稗田頭C遺跡）について遺跡群の相互関係の観点から概略を記述し、本遺跡との関連性を考えてみたい。

大泉山南・西麓遺跡群の概要 この群で最も規模大きな遺跡は、上の平遺跡で小規模な遺跡が大泉山麓の扇状地単位に点在する形を探るが、群とするとその範囲はあまり広くはなく、同一地形内に複数の遺跡が立地することがないことに特徴を持つ。

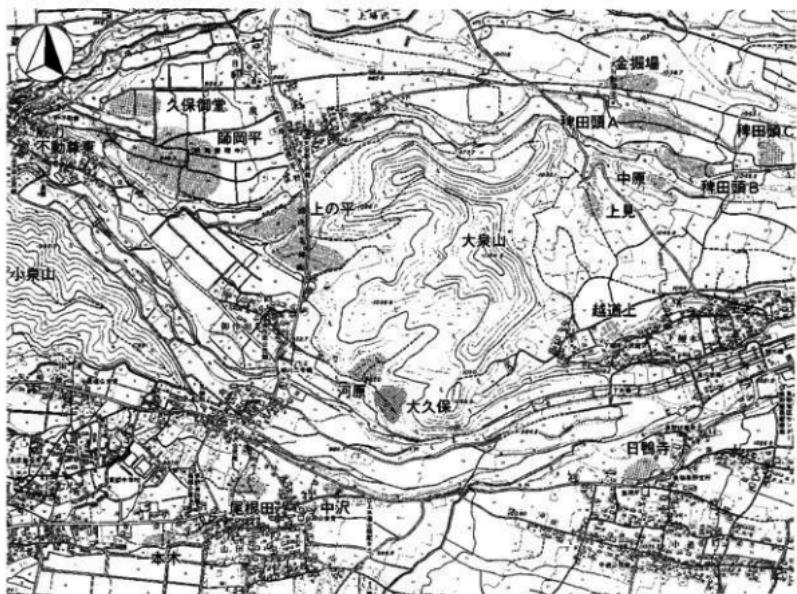
上の平遺跡 御作田集落の北側に位置する尾根状台地から、大泉山麓に位置する。遺跡の立地する台地は割合複雑な形状を示している。上の平遺跡は4回にわたる調査がなされている。昭和22年農道改修に伴い官坂英式の指導のもと、豊平中学校生徒により発掘調査が行われ、縄文時代中期中業の堅穴住居址1が発掘されている。その後開発行為に伴い調査が行われ、昭和60年に中期中業堅穴住居址1、平成元年には中期中業1、平安時代1の堅穴住居址が発掘された。特に平安時代の住居址からは石帯が出土している。

本格的な調査は平成6年に県営は場整備事業に伴う発掘調査が、大泉山の西麓で行われた。その結果前期末業の堅穴住居址3、土坑86、平安時代末業堅穴住居址1が発掘され、大泉山周辺における前期末業の集落形成期の諸問題について解明する方向が見いだされてきている。

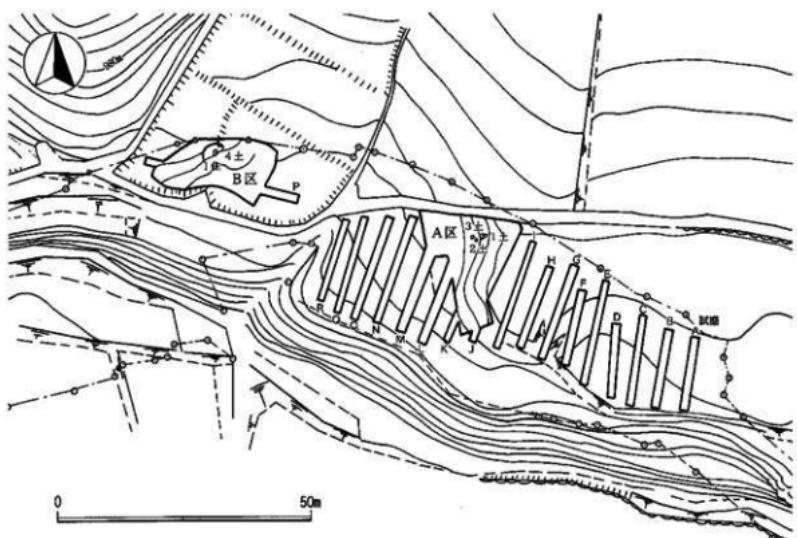
大泉山東麓遺跡群（桜木遺跡群）の概要 大泉山南・西麓遺跡群と大泉山を隔てて位置する。この地域は八ヶ岳火山活動起源の台地が発達している。この台地には縄文時代草創期・早期末業・前中期初頭～中期末業・後期前業・平安時代末業の遺跡が群となって展開する。大泉山南・西麓遺跡群とは直接的な関連を見いだすことはできないが、隣接して捉えると何らかの関連性を有していたものと考えられる。また、遺跡の存続時期や遺構構成に類似点が認められ、比較検討することで遺跡群間の特性が抽出できるものと考えられる。

上見遺跡 桜木集落の北側に形成される第Ⅱ段丘面の先端部に位置する。遺構は旧石器時代の遺物ブロック、縄文時代中期初頭の土坑・落とし穴群が検出されている。落とし穴群は台地の先端からやや奥まった位置に、台地長軸に沿った形で1列に並んだ形で検出されている。また、中期初頭の土坑が落とし穴群と重複し、土坑は中期初頭に帰属し、落とし穴はそれよりも若干古いものと捉えられる。

中原遺跡 本遺跡は上見遺跡と深い谷を挟んで、北側に対峙する細い小規模な台地に立地する遺跡で、東西方向に延びる細長い台地のほぼ中央部より遺構が検出されている。遺構は縄文時代早期末業の堅穴住居址



第2図 周辺の遺跡とその地理的位置 (1/20,000)



第3図 周辺の地形と遺構分布 (1/1,000)

2、中期初頭の大型竪穴住居址1、土坑6、落とし穴1が検出されている。

稗田頭B遺跡 中原遺跡の北側の深い谷を挟んだ台地先端部に位置する。遺構は台地先端が分岐し始めるほぼ中央部に展開し、縄文時代中期初頭竪穴住居址9、土坑53、落とし穴13が検出されている。落とし穴は台地南側肩部に台地長軸に沿った形で2列の配列が認められた。これらの落とし穴群は重複関係等より早期末葉以前に比定されている。

稗田頭A遺跡 稗田頭B遺跡の北側谷を挟んだ尾根状台地先端部に位置する。遺構は台地先端部を中心に展開し、縄文時代中期竪穴住居址31、後期前葉6、土坑527が検出されている。落とし穴は7検出され、これらはその配列より2群に分けられる。時期を明確にできないが、後期前半の敷石住居址下より落とし穴が検出されているため、中期終末以前に帰属しよう。

稗田頭C遺跡 稗田頭A遺跡と稗田頭B遺跡の立地する台地が上部で合致し、平坦な台地となる部分に立地する。縄文時代中期初頭9、平安時代末葉1の竪穴住居址、土坑735が検出され、中期初頭の限定された時期の集落であることが把握された。なお、落とし穴の検出はなされてはいない。

梵天原遺跡 上見遺跡・中原遺跡・稗田頭A遺跡・稗田頭B遺跡・稗田頭C遺跡の上部で、枝分かれした台地の基部に当たる広い台地状に位置する。落とし穴51、土坑27が検出された生産域と位置付けられている遺跡である。直接時期を窺い知ることのできる資料は得られてはいないが、落とし穴の類型より縄文時代早期末葉と前期末葉、中期初頭に比定されている。

大久保遺跡と周辺の遺跡との関連性 大久保遺跡周辺に位置する遺跡群との直接関連を窺えるような遺構や遺物は得られてはおらず、視覚的には大泉山が大きく山麓台地を分断しているように捉えることもできそうではあるが、大泉山を中心に接する広い台地に点在する遺跡には、その遺跡構造から前期末葉・落とし穴をキーワードとしたつながりを、求めることができそうである。なお、後章において大泉山東麓遺跡群と大泉山南・西麓群の遺跡群の在り方・関連性を、前期末葉・落とし穴を関連付け考察を加えたい。

2. 遺跡の研究史

今回の発掘調査以前の考古学的調査 縄文時代の遺跡が密集し、古くより研究の進んでいる八ヶ岳西南麓の中において、本遺跡の存在は知られていないものであった。これは遺物の散布が著しく希薄な点に起因するところが大きく、今回の調査を行わなければ、その実態のわからなかった遺跡である。

3. 遺跡周辺の歴史的事象と史跡

歴史的事象等よりの御作田地区 本遺跡に於いて近世の遺物が若干得られているため、大泉山や御作田地区に關わる文献資料を見ると、大泉山は正徳2年(1712)「御用部屋日記」に見られるように、草場論争の地として、また、その後周辺地区的入会関係の古文書が散見できる。御作田村は古田村の新田として正保2年(1645)に作られ、寛文12年(1672)の検地目録によると、田が3反7畝4歩、畠が2町5反余、高の合計23石である。御作田の命名であるが、同地が諏訪大社上社藤島社田植神事の御作田祭の賛を狩る場所から付けられたと言われている。

御作田の史跡 史跡ではないが名勝として柳川と大泉山間に多留姫の滝がある。滝の脇には諏訪明神の御子多留姫神を祭神とする神社が祀られ、嘉永3年(1850)の「祝詞段」に「中澤ニタルノゴゼ」の記載が見られることより、このころには多留姫神社があったことがわかる。

多留姫の滝周辺は藤の古木と大泉山の岩場に生える老松、2段の滝よりなる景勝の地として古くより親しまれており、明治期には多くの文人が歌会を開催し、樽姫神苑として載酒亭なる四阿も造られるなどの整備がなされ、20基に及ぶ地元の歌人等の句碑・歌碑が建立されている。

また、多留姫の滝には膳・碗の貸し出しに関わる話や、滝壺に糠を流せば上原葛井の池に浮かぶとの伝説が残され、民俗学的にも貴重な地域である。なお、多留姫の滝は名勝(瀑布)として昭和63年7月29日付けをもって茅野市指定名勝に指定されている。

第Ⅲ章 遺跡の層序と調査区の概要

第1節 調査区の基本的層序

1. 土層の基本的な堆積状況

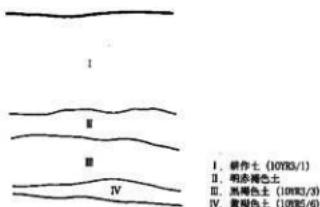
基本層序の概要 本遺跡の立地している崖錐地形は、大泉山起源の変質輝緑岩の破碎礫を多量に含む堆積層を基盤とし、部分的に二次堆積的なロームが範囲によっては堆積する。これに崖錐頂部より供給されたと考えられる有機物腐食物の堆積物である黒色土が堆積し、地形全体を形成している。

調査区全体は畠地造成により地形が改変されているが、全体的には大泉山斜面の崩落に伴う崖錐地の状態を色濃く残している。調査区が道路敷きに限定されているために、頂部から端部にかけてつながった状態の土層の堆積状況を調べることはできなかった。そのため土層観察は崖錐地形に地下水浸食で形成された谷状の土砂堆積が最も深い部分に於いて行った。調査区の最も土層堆積の深い部分である崖錐地内に西側壁で、ちょうど台地南側縁邊から入り込む谷部肩部分の土層状態を観察している。発掘調査で縄文中期と後期の遺物が検出されているが、生活面の分層には至ってはない。

- I層 農作土 色調は黒褐色 (10YR3/1) を呈する。粘性を若干持ち締まりがある。内部には3~4mm大の山より供給された変質輝緑岩粒子を含有するためざらつく。
- II層 明赤褐色土 調査区の北西側山裾際では薄く、南側斜面谷部に至るにつれ厚く堆積している土層で、粘性度は高く、締まりを有している。内部にはI層と同様に小礫を含有するが、その大きさはI層よりもやや大粒の4~6mm大で量的にも多い。
- III層 黒褐色土 調査区の谷部に至るにつれ層厚が厚くなる傾向にあり、これはII層と同様な傾向である。締まりがよく割合硬質で粘性を持つ。内部に3~4mm大小の小礫を含有する。色調は黒褐色 (10YR3/3) を呈する。
- IV層 黄褐色土 調査区全体の基盤層で、色調は黄褐色 (10YR5/6) を呈する。締まりはよく粘性を持ち硬質で、5~15cm大小の小礫を5%含有し、部分的にその礫が突出する部分がある。

2. 土層の成因と性格について

土層の状態 土層をI層からIV層の4群に分類した。I層は現在の畠地耕作に関わる土層群である。II層はその状況から崩落起因の土層の再堆積かと考えられ、遺構の掘り方はこの層上面から確認される。III層はプライマリーな土層で、調査区の一部の範囲に認められた。谷部を中心に認められた点より、谷部へ堆積する土層の可能性が高い。IV層は地山層であるが、崖錐地形の成因基盤層と考えられ、内部に含有されている岩石内には、大泉山基層の変質輝緑岩を含んでいる。



第4図 遺跡の基本層序 (1/20)

第IV章 検出された遺構と遺物

第1節 検出された縄文時代の遺構と遺物

1. 検出された縄文時代の遺構

断続や時期により遺構数の過多はあるものの、今回の調査により縄文時代前期末葉と考えられる遺構が検出されている。

遺構の分布について 遺跡は大泉山裾に入り込む崖錐地形に位置し、崖錐地形内を詳細に観察すると含有地下水の浸食による小規模な谷が、崖錐地形のほぼ中央部に入り込む。この谷を挟んで都合上調査区A区とB区を設定したが、遺構もこの谷を挟んで散在する形を探る。

遺構は台地内に入り組む小規模な谷状地形を隔てて大きく二群構成となり、西側山裾際崖錐端グループと崖錐地中央グループに分けられる。地形の状況より推定すると住居址の検出された西側山裾際の方が、風当たりや日照条件を勘案すると、居住環境の適地と考えることができる。なお、集落を想定するならば、西側山裾に住居址が散在する小規模な集落を想定できる。

検出された遺構の概要 今回の調査により竪穴住居址1、土坑4が検出されている。時期を示すような遺物を含んでいないが、構造や周辺包含層からの遺物を考慮すると、縄文時代前期末葉に帰属させることができそうである。

A. 竪穴住居址

第1号住居址（第5図・図版2）

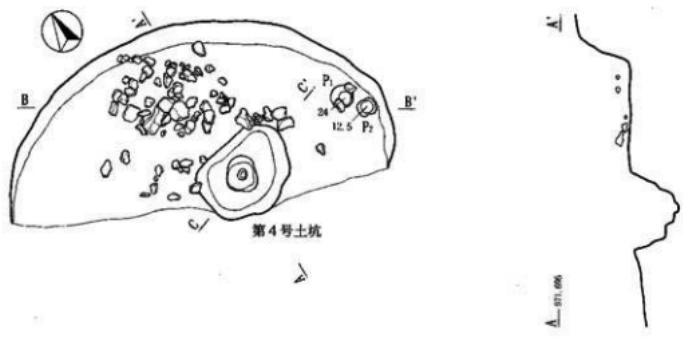
位置： 本址は調査区B区の西側山裾際から確認された。住居址は崖錐地形が浸食され形成された深い谷に向く緩やかな斜面部に占地する。

平面プラン： 住居址の南東側は谷に向かい傾斜するため流出しており、全体プランの約1/2が検出されたに過ぎない。検出し得た壁より想定すると、北東側がやや不整形な不整円形プランを呈するものと考えられる。住居址の規模は約1/2だけの確認のために不明確であるが、検出された遺存部で推定すると直径4.5mの不整円形プランを想定できようか。

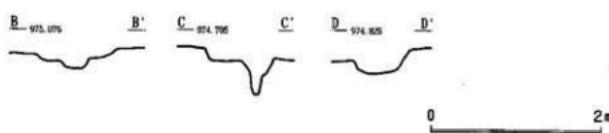
内部構造（柱穴・掘り方等）： 最も明瞭に確認された北西壁側はしっかりした割合直線的で、床面境が明瞭であり、最も明瞭で高い北西側で54.5cmを測る。周溝・壁際の小孔は確認されていない。配列や深さより主柱穴と思われるP₁、P₂の2本が検出されている。柱穴の掘り方はしっかりしているが径20cm前後、割合小型で、深さもP₁24cm、P₂12.5cmで平均すると約18.25cmと浅い。住居址内ほぼ中央部に第4号土坑が検出されている。上面に貼り床がなされていない点等を考慮すると、住居址廃絶後に掘り込まれたものと考えられる。床面はほぼ水平だが、硬化した面の確認はなされてはおらず、一部に地山の礫が突出する。床面上には10~20cm前後の礫が6~8cm前後浮いた状態で検出されている。これらの礫は地山に含有されているもので、北壁側から中央部に向かった形で分布するが、第4号土坑上面には認められない。

炉址： 炉址の確認はできなかった。

覆土の状況： 覆土は締まりのよい褐色土（10YR4/4）の単一層で、内部には1~2mm大の炭化物粒子を2%前後含有する。覆土内に第4号土坑が重複する形を探るが、土層観察位置が重複位置とされたために、観察することはできなかった。なお、第4号土坑掘り下げ時に再観察を行った結果、第4号土坑覆土褐色土（7.5YR4/3）が本址覆土を切っている状態が観察された。床面上に検出された一括廃棄の状況を示す礫の出土状態や、覆土の状態を考えると、本址は人為的に埋め戻されたものと捉えることができようか。



第3号土坑



第5図 挖出された遺構（第1号住居址・第1号～4号土坑）(1/60)

遺物出土状況： 北西壁側覆土上層より土器片1・打製石斧1・黒耀石製石器ブランク1・剥片石器1・剥片3が出土している。

B. 土坑

第1号土坑（第5図・図版2）

位置： 本址は調査区A区西側斜面部より確認された。土坑は台地の斜面部に占地し、西側に第2号・3号土坑が隣接する。

重複： 重複関係は有してはいないが、西側に他の土坑と隣接する。

平面プラン： 平面プランは東西方向に長軸を持つ不整規円形を呈する。長軸方向が東西方N-46°-Wを向く長軸1.42m、短軸0.94mのやや東側が広がる長梢円形を想定できる。

内部構造（掘り方等）： 土坑の掘り方は、斜面に構築されている関係から東側が削合明確で、西側が浅いものとなる。壁は若干の傾斜を持ち立ち上がり、深さは確認面より東側で9.9cm、西側で2.2cmを測る。坑底は軟弱で若干の凹凸を呈する。ほぼ中央部に重複する坑底ピットが認められるが、その掘り方は10.5cmと浅い。

土層の状況： 土坑の覆土は褐色土（7.5YR4/3）單一層で、土質は締まりがよく粘性を有し、4mm大の炭化物を微量に含有する。また、地山に含有される小砾を1%程度含有する。土坑の構造や構築位置よりみて本遺構は落とし穴と考えられる。

遺物出土状況： 遺物等は出土しておらず、帰属時期は不明である。

第2号土坑（第5図・図版2）

位置： 本址は調査区A区西側斜面部より確認された。土坑は台地の斜面部から緩斜面に至る部分に占地し、北東側に第1号土坑、北側に第3号土坑が隣接する。

重複： 重複関係は有してはいないが、北東・北側に他の土坑と隣接する。

平面プラン： 平面プランは東西方向に長軸を持つ不整円形を呈する。長軸方向が東西方N-40°-Wを向く長軸66cm、短軸56cmのやや東側が広がる円形である。

内部構造（掘り方等）： 土坑の掘り方は、掘り方は不明瞭で壁は若干の傾斜を持ち立ち上がり、深さは確認面より東側で25.2cm、西側で14.8cmを測る。坑底は軟弱で緩やかな皿状を呈する。

土層の状況： 土坑の覆土は暗褐色土（10YR3/3）單一層で、土質は締まりがよく粘性を有する。

遺物出土状況： 遺物等は出土しておらず、帰属時期は不明である。

第3号土坑（第5図・図版2）

位置： 本址は調査区A区西側斜面部より確認された。土坑は台地の斜面部から緩斜面に至る部分に占地し、北東側に第1号土坑、南側に第2号土坑が隣接する。

重複： 重複関係は有してはいないが、北東・南側に他の土坑と隣接する。

平面プラン： 平面プランは東西方向に長軸を持つ不整円形を呈する。長軸方向が東西方N-75°-Eを向く長軸82cm、短軸71cmのやや東側が広がる円形である。

内部構造（掘り方等）： 土坑の掘り方は、掘り方は不明瞭で壁は若干の傾斜を持ち立ち上がり、深さは確認面より東側で18.3cmを測る。坑底は軟弱で緩やかな皿状を呈し、坑底に擾乱と考えられる小孔が検出される。

土層の状況： 土坑の覆土は暗褐色土（10YR3/3）單一層で、土質は締まりがよく粘性を有する。

遺物出土状況： 遺物等は出土しておらず、帰属時期は不明である。

第4号土坑（第5図・図版2）

位置： 本址は調査区B区東側斜面部第1号住居址内ほぼ中央部に重複する形で確認された。

重複： 第1号住居址と重複関係を持っているが、上面に貼り床や埋め戻しを行っていない点より、第4号土坑が第1号住居址覆土内に掘り込んだものと考えられる。

平面プラン： 平面プランは南北方向に長軸を持つ不整橿円形を呈する。長軸方向が南北方向N-72°-Eを向く長軸1.12m、短軸0.91mのやや東側が広がる長橿円形を想定できる。

内部構造（掘り方等）： 土坑の掘り方は、住居址内に構築されている関係から明確で直に近い形で立ち上がり、深さは確認面より東側で30.3cm、西側で28cmを測る。坑底は軟弱で若干の凹凸を呈する。ほぼ中央部に重複する坑底ピットが認められるが、その掘り方は8.3cmと浅い。

土層の状況： 土坑の覆土は褐色土(7.5YR4/3) 単一層で、土質は締まりがよく粘性を有し、4mm大の炭化物を微量に含有する。また、地山に含有される小礫を1%程度含有する。土坑の構造や構築位置よりみて本遺構は落とし穴と考えられる。

遺物出土状況： 遺物等は出土しておらず、帰属時期は不明であるが、第1号住居址を切っている点から縄文時代前期末葉よりは新しいものと考えられる。

2. 縄文時代前期遺物の概要

今回の調査により得られた資料は、調査面積・検出遺構数に比較して少ないと見える。試掘調査時に検出された縄文時代前期末葉の土器片1点の他は、第1号住居址覆土内からの出土である。

遺物の時期について 遺物内での確に時期を示している資料は、試掘調査時に得られたものだけである。第1号住居址からも土器片1点が出土したが、無文であったために時期を明確にし得てはいないが、胎土・焼成の状況から前期末葉の資料と捉えた。

A. 遺構内出土遺物

第1号住居址（第6図1～7）

土器（第6図1）： 1は深鉢副部下半破片。輪積み部で破損している。施文はなされておらず、強い縱方向のナデ整形がなされる。焼成は良好で、胎土中には雲母粉・石英粒子を5%含有し、色調は灰褐色を呈する。

打製石斧（第6図2）： 2は輝緑岩打製石斧破片である。刃部は使用による磨痕の状況が顕著に観察でき、平面觀はやや偏ったU字形を呈する。横剥ぎ剥片を素材としており、表面に自然面と裏面に主要剥離面を有する。調整剥離は素材剥片の側縁を中心に行われているが、大きく素材の形を変形させてはいない。遺存長6.5cm、最大幅4.6cm、重量50.5gで、その状況から削合小型の規格に属する。規格だけで時期の決定をすることはできないが、前期末葉の打製石斧が多量に得られている大田辺遺跡の資料と比較すると類似するものがあり、今回得られた資料も同期に帰属させることができよう。

剥片（第6図3）： 3は変質輝緑岩の剥片である。平坦な調整打面から数回に亘る剥離が行われた後、大きく母岩から剥離され不定型な分厚い剥片が採られている。使用痕や調整剥離等は観察できない。変質輝緑岩または輝緑岩の剥片や素材礫は、市域に於いてこれらの岩石を基層に持つ朝倉山や大泉山、小泉山周辺に位置する遺跡に少量が供給される、小地域供給型の特徴的な石材である。今回大泉山山麓でもこの剥片が得られたことは原石の供給等の関連から興味深いものがある。

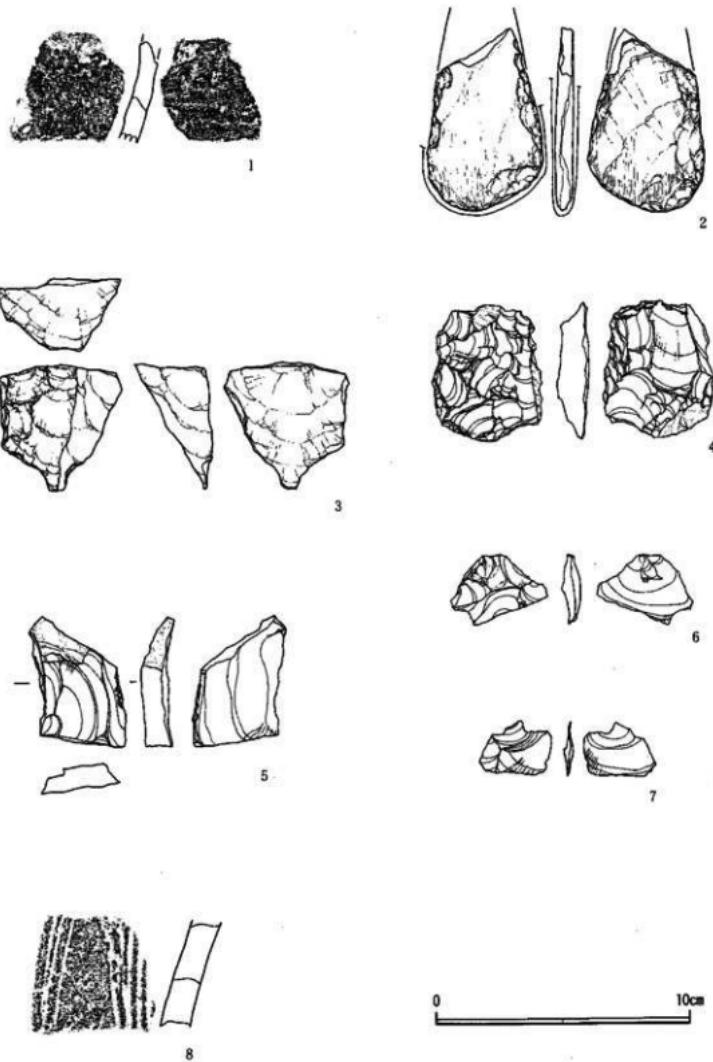
石器プランク（第6図4）： 板状の黒耀石粒を素材としている。四角い平面形状を意識し、素材を薄く整えるための調整が4辺よりなされ、側縁調整または素材の厚さ調整のために両極打法を用いている。そのため側縁には階段状剥離が認められる。

剥片石器（第6図5）： 板状の黒耀石原石の横剥ぎ剥片を素材とする。鋭い側縁に細かな剥離痕が認められる。

黒耀石剥片（第6図6・7）： 両者共に裏面に主要剥離面を有する。6は一部に自然面を有し、平坦な自然面を打点とし、ポジティブなバルブを残す。7は打点部を欠くが、両者共に調整剥離作業工程時に生じた剥片と捉えられよう。

B. 遺構外出土遺物

遺構外（第6図8）



第6図 検出された遺物（1～7は第1号住居址、8は試掘Pトレンチ）（1～3・8は1/2、4～7は1/1）

土器（第6図8）：8は特掘トレンチP西側より出土した。深鉢胴部中段の破片。輪積み部で破損している。半截竹管状工具による平行沈線が縦位矢羽根状？構成に施文される。裏面は丹念なナデ整形がなされている。胎土には1mm大長石・石英粒子10%、雲母粉2%を含有し、焼成は良好堅緻で色調は明赤褐色を呈する。施文、胎土の状況から縄文時代前期末葉諸磽式に帰属させることができよう。

第V章 調査の成果と課題

第1節 縄文時代前期末葉の大久保遺跡の様相

1. 大久保遺跡の特徴

大久保遺跡の遺物の構成と時期 今回の調査の大きな特徴は、遺構数に比べ遺物数が少ない点を挙げることができる。第1号住居址より得られた資料は、土器片1、打製石斧片1、黒耀石製石器ブランク1、黒耀石剥片石器1、黒耀石剥片3、変質輝緑岩剥片1だけであり、その組成は貧弱である。遺構外の遺物を加えても土器片2（2個体分）と遺跡内での土器の使用頻度の低さが窺える。しかし、石器等の道具は認められないものの、黒耀石調整剥片の存在より若干の石器生産が行われた可能性も考えられるが、その内容は剥片の量から見て貧弱なものであったと考えられる。これらの状況より、この地に於ける生活が割合短期または、貧弱な生活様相の遺跡と捉えることができよう。

遺構構成からの特徴 今回の調査により堅穴住居址1、落とし穴2、土坑2が散在する形で検出されている。遺構間での重複関係が少ないと考慮すると、短期の遺跡であった可能性が高い。また、遺構が散在する点を考慮すると、一定の集落形を呈していたものとは考えられないが、落とし穴は崖錐地に入り込む浸食谷を意識し構築される傾向を看取れる。落とし穴は群をなさず単独で検出され、その構造も簡易な部分が認められたことより集団獣的なものとしてよりも、単独獣的な意図のもとに構築された可能性が考えられる。

2. 八ヶ岳西南麓の縄文時代前期末葉の遺跡

近年の開発事業に伴い八ヶ岳西南麓の遺跡内容は徐々に明らかになりつつある。特に遺跡数と遺跡の時期についての情報は、従来の研究成果に加え、様々な新見地が得られている。中でも縄文時代前期末葉から中期初頭の情報については、遺跡群の情報、集落形成の情報、遺跡構造の情報等がより具体的となってきている。

遺跡数とその分布について 現在八ヶ岳西南麓の渋川から柳川に挟まれた山麓台地に、縄文時代遺跡は77ヶ所が登録されている。そのうち前期末葉に帰属するものは16ヶ所、中期初頭は11ヶ所が確認されている。これらの遺跡について分布状況を見ると、数群の大きなまとまりが存在するようである。特に北山地区渋川南側台地に認められる、北山菖蒲沢A遺跡（前期末葉）、北山菖蒲沢B遺跡（中期初頭）、矢倉田遺跡（前期末葉）群や、古田地区柳川北側台地の上の平遺跡（前期末葉）、師岡平遺跡（前期末葉）、威力不動尊東遺跡（中期初頭）、久保御堂遺跡（中期初頭）群、櫻木地区柳川北側台地では稗田頭A遺跡（前期末葉）、中原遺跡（中期初頭）、上見遺跡（中期初頭）、梵天原遺跡（中期初頭）、稗田頭C遺跡（中期初頭）、稗田頭B遺跡（中期初頭）群の4群が認められる。これらの状況を概観すると、どうもこの時期に中期に繋がる遺跡群が形作られたものと捉えることができ、「そうした遺跡立地の特徴は、生業や生活様式が確実に中期的なものへと変わったことを示すものである。」（織飼：1986）と表現されるように、一つの八ヶ岳西南麓に於ける画期と捉えることができる。

前期末葉・中期初頭の遺跡の特徴 櫻木地区柳川北側台地群の、前期末葉から中期初頭の遺跡について、検出された遺構構成から群別が行われ、それぞれの関係について分析された。それによると、遺跡群は

多様なタイプの遺跡が組み合わさり大きな群を構成し、遺跡間で補完関係を有していたのではとの考えがなされている（守矢：1994）。この状況は単に櫻木地区にだけ当たるのではなく、他の地域に於いても同様な傾向を示すものと言えよう。

3. 大泉山周辺の縄文時代前期末葉の遺跡

遺跡群の展開 大久保遺跡周辺の遺跡分布の状況については第Ⅱ章第2節に詳しいが、この地域が大泉山を挟み、大きな二つの群より成り立っていることがわかる。また、遺跡の存続時期を比較してみると、前期末葉から中期初頭の時に一つのピークが認められることに特徴を持つ。

大泉山南・西麓遺跡群の遺跡について前期末葉（第0期）から中期初頭（第I・II・III期）について遺構別に整理すると、下記表のようになる。それによると、この地域には前期末葉諸磯^c式期後半（第0期）に集落が形成される。^(註2) 遺跡の内容は、数軒の堅穴住居址と土坑から成り立つcタイプ集落が初源的な形と捉えられ、上の平遺跡の形を基本とするが、威力不動尊遺跡の調査は広範囲に至っていない点などを考慮すると、上の平遺跡と同様な状況の集落となろうか。このような集落に大久保遺跡のようなbタイプ集落（小規模集落）が付属し、狩猟域として師岡平遺跡の落とし穴群が組み合わさる構成となろう。このような第0期の遺跡展開は、大泉山東麓の遺跡群の在り方にも認められるが、bタイプの集落が認められない点に相違を見いだすことができる。

大泉山南・西麓遺跡群の中期初頭（第I・II・III期）はcタイプ集落が核となる。大久保遺跡の落とし穴の所属時期が不明確ではあるが、もし第4号土坑を中期初頭とするならば小規模な落とし穴が伴う遺跡と捉えることができよう。このように第0期に認められた集団獵を思わせる落とし穴群は欠落し、小規模なものへと推移していく形が窺える。また、中期初頭cタイプ集落に認められる貯藏穴と思われる土坑の群在化は、^(文獻3) 植物依存への現れと捉えられ、小泉山東麓（櫻木台地）の前期末葉から中期初頭への遺跡構造変化から、狩猟域が植物を背景にした生産域への推移を捉えた状況（守矢：1996）と同様な傾向を大泉山南・西麓遺跡群でも認めることがある。

大泉山東麓に於いて前期末葉集落の様相について不明確な部分があり、詳細に述べることはできないが、集落域と狩猟域の関係を概観すると、集落と集団獵を想定しうる落とし穴群の狩猟域の組み合わせを基本としている。これに対して、大泉山南・西麓では、東麓の状況に単独または、小規模な落とし穴が加わる状況にある。この差が何に起因するかを明らかにすることはできないが、大泉山山麓を中心とした地域が、八ヶ岳西南麓の縄文時代前期末葉から中期初頭にかけて一つの核的な地域で、そこには様々な様相の遺跡が群として存在していたことがわかる。

第1表 大泉山南・西麓遺跡群の縄文時代前期末葉から中期初頭の遺跡と遺構

時 期	遺 跡 名	主 な 遺 構
第0期	上の平	1住・3住・4住・8・62・63・65・121土坑
	威力不動尊東	2・3・7・26・58土坑
	大久保	1住
	師岡平	I群土坑（落とし穴）
	久保御堂	I群土坑（落とし穴）
第I期	威力不動尊東	1・2住
	久保御堂	住居
	大久保	4土坑（落とし穴）
第II期	師岡平	7区2住
第III期	師岡平	7区1住・135・138・143・162・194土坑

4. 大泉山周辺遺跡群での大久保遺跡

大久保遺跡と周辺遺跡との関わり　　大久保遺跡は大泉山周辺の遺跡群の中でも、規模も小さく存続時期も短い遺跡であると捉えられた。この遺跡が縄文時代前期末葉に、周辺遺跡と何らかの相互関係を有しながら存在したことがわかったが、大久保遺跡の場合遺構構成や遺物量から類推すると、短期の出村的な性格を想定できそうで、隣接する上の平遺跡等と関連性を持って存在した可能性が高い。

前項で大泉山周辺遺跡群の一つの特性として、集団獵を思わせる落とし穴群の検出を挙げることができるが、今回大久保遺跡で検出された落とし穴は、構築状況や群在しない単独検出である点から単独獵に関わる可能性が高く、短期の出村に設置された単独獵的な落とし穴といった性格を与えることができようか。

今回の大久保遺跡の調査は、道路敷に限定された調査であり遺跡内容全体の把握には至ってはいないが、遺跡の大枠は捉えられたものと考えられる。

大久保遺跡のような小規模集落と、核的大規模集落との関連を深めるために今回は貴重な成果を上げたものと言えよう。今後調査の積み重ねの詳細な分析により、遺跡群の構造がより具体的に現せるものと考えられる。

註

(註1) 变質輝緑岩または輝緑岩の剥片は、朝倉山周辺では高風呂遺跡、上ノ平遺跡、一ノ瀬・芝ノ木遺跡、大田刈遺跡、中ヶ原遺跡で、小泉山周辺では梨ノ木遺跡、大泉山周辺では師岡平遺跡、上の平遺跡で出土している。

(註2) 集落のタイプ分類は文献2に準拠した。

参考文献

(文献1) 繩飼幸雄 1986 「第二章縄文時代 第四節縄文時代の茅野」『茅野市史』上巻 茅野市

(文献2) 守矢昌文 1994 「第Ⅳ章調査の成果と課題 第2節縄文時代中期初頭における稗田頭C遺跡周辺の遺跡の展開について」『稗田頭C遺跡』茅野市教育委員会

(文献3) 守矢昌文 1996 「第V章調査の成果と課題 第1節梵天原遺跡の落し穴状土坑について」『梵天原遺跡』茅野市教育委員会



遺跡遠景（南側より）



遺跡近景（南側より）



遺跡近景（西側より）

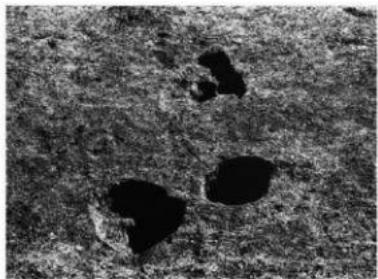
図版 2



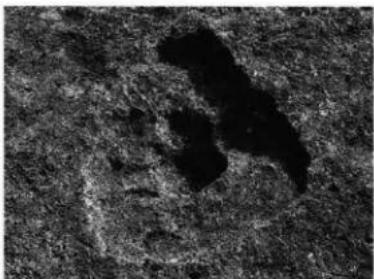
▲第1号住居址



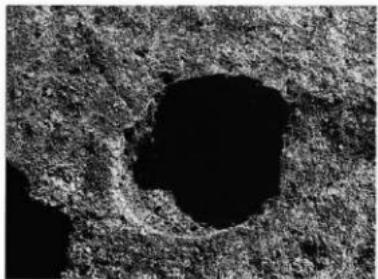
▲第1号住居址完掘状態



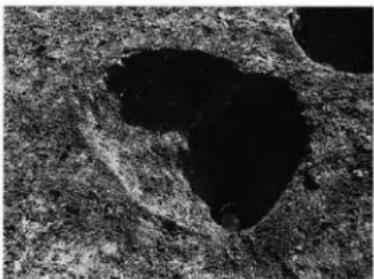
▲第1・2・3号土坑



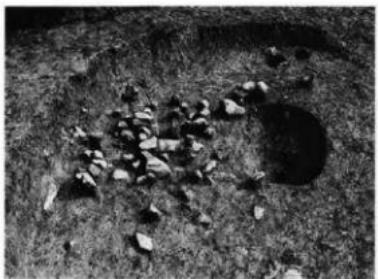
▲第1号土坑



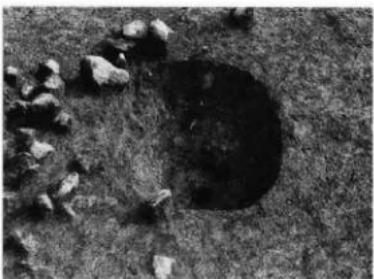
▲第2号土坑



▲第3号土坑



▲第1号住居址内第4号土坑



▲第4号土坑

報告書抄録

ふりがな	おおくぼいせき						
書名	大久保遺跡						
副書名	平成15年度国補緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	守矢 昌文						
編集機関	茅野市教育委員会						
所在地	〒391-8501 長野県茅野市塙原二丁目6番1号 TEL0266-72-2101						
発行年月日	西暦2004年3月8日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大久保	長野県 茅野市 御作山 大久保	20214	331			2003.11.14 2003.12.11	700m ²	国補緊急地方 道路整備事業 に伴う事前調 査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
大久保	集落址	縄文 前期末葉	竪穴住居址 土坑	1 前期末葉土器片 4 黒耀石剥片 変質輝緑岩剥片 打製石斧 黒耀石製石器ブランク 黒耀石製剥片石器 瀬戸本業染付磁器碗片	2 3 1 1 1 1 1	葉の小規模な集 落で、落とし穴 の検出から狩猟 城も兼ねていたた ことがわかる。	縄文時代前期末 葉の小規模な集 落で、落とし穴 の検出から狩猟 城も兼ねていたた ことがわかる。

大久保遺跡

——平成15年度国補緊急地方道路整備事業に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書——

平成16年3月3日 印刷

平成16年3月8日 発行

編集行 茅野市教育委員会
長野県茅野市塚原二丁目6番1号
TEL (0266) 72-2101

印刷 水明社印刷所
長野県茅野市塚原二丁目12番30号
